

副詞における程度的意味発生の過程の類型

著者	鳴海 伸一
雑誌名	国立国語研究所論集
号	6
ページ	93-110
発行年	2013-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000513

副詞における程度的意味発生の過程の類型

鳴海 伸一

京都府立大学／国立国語研究所 共同研究員 [-2013.10]

要旨

本稿では、これまで拙稿で扱ってきた漢語副詞の具体的事例を中心に、その他類似の事例を合わせて示しながら、副詞の意味変化において程度的意味が発生する過程にはどのようなものがあるのかを検討した。特に、程度的意味の周辺の意味との関わりで、どのような意味からどのような程度的意味へと変化し得るのかということを通時的視点から理解することをめざした。その結果、先行研究をもとに、程度的意味が発生するパターンを提示し、それぞれについて具体例に即して程度的意味発生の過程を検討した。類型としては、以下の①～③のものを示した。また、程度的意味とその周辺の意味である評価の意味の関係については、④のものを示した。

- ①量的意味から程度的意味へ
- ②「真实性」の意味をもとに、評価の意味が程度（度合強調）性を帯びる
- ③「比較性」の意味をもとに、評価の意味が程度性を帯びる
- ④程度的意味が評価性を帯びる*

キーワード：程度副詞，程度的意味，評価の意味，真实性，比較性

1. はじめに

日本語は古くから多くの漢語を受容してきているが、日本語の中で独自に副詞用法を獲得したものの中には、程度的意味を発生させる事例がある。例えば、「相当」「随分」は具体的な分量の大きさを表す副詞から、抽象的な程度の高さを表す程度副詞として発展していった（「相当」については拙稿 2009 参照、「随分」については拙稿 2012a 参照）。また、「むげ」は、「無下」という漢字表記と結びつくことで〈それより下が無い（ほど悪い）〉という程度副詞的用法を発生させた（「むげ」については拙稿 2008 参照）。このようなものは、もともと程度的意味を持たなかったものが、程度的意味を持つようになるものであって、漢語の国語化の一つの類型であると同時に、副詞化による程度的意味の発生という副詞の意味変化のパターンの一つでもある。

このように、程度的意味が発生するというのは、副詞の意味変化全体の中でも一つの重要な現象であると考えられる。また、これまで、程度副詞化する現象の個別的な指摘は多くある。しかし、一般に程度的意味が発生する際に、それ以前の意味とどのような関係にあるのかといったことや、程度的意味がどのように変化・展開していくかという変化の過程については十分考えられてこなかった。また、その過程はある程度類型的な性格を持つと思われるが、そのような点、すなわち、変化の類型としての検討はなされてきていない（時間的意味発生の過程と類型につい

* 本稿は国立国語研究所の萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」(プロジェクトリーダー:新野直哉, 2010年11月～2013年10月)の研究成果であり,共同研究発表会(2012.6.10)において発表したものをもとにしている。

では拙稿 2012b 参照)。だとすれば、副詞化による程度的意味の発生には、どのような過程があるのか、また、それらは、どのような類型としてまとめられるのか、といったことが問題になる。

そこで本稿では、拙稿で扱ってきた漢語副詞の具体的事例を中心に、その他類似の事例を合わせて示しながら、副詞の意味変化において程度的意味が発生する過程にはどのようなものがあるのかを検討する。特に、程度的意味の周辺的な意味との関わりで、どのような意味からどのような程度的意味へと変化し得るのかということを通時的視点から理解することをめざす。すなわち、程度的意味発生にはどのような過程があり、そしてそれらがどのような類型としてまとめられるのかということを示すことを目的とする。

2. 程度副詞の特徴

副詞の中には、程度副詞と呼ばれる一群の語がある。主に状態性の語に係って、その程度を限定する副詞である。しかし、程度副詞には、古い時代から長期間に渡って程度副詞として使用されているものは少ない。また、もともと程度副詞でなかったものが程度副詞として使用されるようになったものがよく見られる。ここで試みに、工藤浩（1983）などを参考に、現代語の程度副詞にはどのようなものがあるか見てみる。次に挙げるようなものが、現代語の程度副詞として考えられるものである。

非常に、大変に、はなはだ、ごく、すこぶる、極めて、至って、とても、だいぶ（だいぶん）、随分、おそろしく、ひどく、相当、大層、かなり、よほど、わりあい、わりと、わりに、けっこう、なかなか、比較的、すこし、ちょっと、少々、多少、心持ち、やや、いくらか、じゅうぶん、よく、もっとも、いちばん、もっと、ずっと、一層、一段と、ひときわ、はるかに、よけい、より、さらに、なお

これらを見てわかるように、程度副詞には、他の品詞から転成したものが多い。「極めて」「至って」などは動詞から転成したものである。「おそろしく」「ひどく」などは形容詞から転成したものである。つまり、他の意味を表していた別の品詞のものが、歴史的にある時期に、副詞化するとともに、程度的意味を発生させているということである。

このことは、程度副詞の特徴として、工藤（1983）が述べるように「斬新で効果的な表現が求められ」ることが関わっているであろう。程度を表す表現には常に新しいものが求められるということである。例えば近年でも、「超」「マジ」「メッチャ」などが見られるようになった。「鬼のように」などは、副詞とはいえないものの、その句で程度副詞的に用いられるものである。つまり、程度副詞の体系の中で、歴史的に見て、新しい表現と古い表現の交代が頻繁に行われるということである。そのように新しい表現を継続的に作り出すためには、他の品詞からの転成ということが、有効な手段であったのであろう。

このように、程度副詞には他の品詞から転成したものが多いといえる。そしてそのことから、程度副詞および程度副詞化について考えることは通時的な問題であるということがいえる。つまり、程度を表す副詞となるにあたっては、どのような過程を経て程度的意味が発生しているのか

を考えることが必要になるということである。

3. 程度副詞への転成の種類

前節では、程度副詞の中には他の品詞から転成したのことが多いことを見た。それでは、具体的にどのようなものが程度副詞化しているのだろうか。

工藤（1983）には、程度副詞に、他の品詞から転成したのことが多いことについての言及がある。そこでは、「用言の副詞形や他の副詞などが、形容詞と組み合わせさせてその程度を限定する用法に立つ。これらをただちに程度副詞と呼ぶことはできないであろうが、また、こうした段階を経てほぼ程度副詞に移行しおえたと思われるものに「すごく ひどく／非常に 大変（に）／極めて 至って」などがあるわけで、これらの類も、程度副詞の周辺の・過渡的なものとして、注意しておく必要はあるだろう」としている。つまり、程度的意味の周辺の意味といえるものがいくつかあり、それらには、程度副詞へと転成する過渡的状态にあるものがあるということである。

また、工藤は、程度的意味の周辺の・過渡的なものとして、次の八種類を掲げている。この工藤が掲げるいくつかの程度的意味の周辺の意味は、その周辺の意味のものから程度副詞へ転成するといえるものである。従って、これらは、程度副詞への転成の種類ということができる。そして、これらについて考えることは、程度的意味というものがどのようにして発生するのかということを考えることにつながっていくであろう。そこで、工藤の挙げる転成の種類をもとに、程度的意味の発生の過程とその類型を明らかにしたい。

以下に掲げるのが、工藤（1983）が、程度的意味の周辺の・過渡的なものとするものである。

A 程度量性の形容詞から

無限に、限りなく、高度に、過度に、極度に

B 目立ち性（主として形容詞から）

ずば抜けて、際立って、並はずれて、飛びぬけて、目立って、かけ離れて、群を抜いて、とびきり、人一倍

C とりたて性 比較性のもの

とくに、殊に、とりわけ、特別に、格段に、殊のほか、何よりも、何にもまして、この上なく、かつてなく、これまでになく、例年になく、たぐいなく、比類なく

D 異常さ 評価的

いやに、ばかに、やけに、やたらに、むやみに、異常に、法外に、べらぼうに、底抜けに、めっぼう、不自然に、極端に、度外れに、途方もなく、とてつもなく、例えようもなく、なんとも（いえず）、世にも（なく）

E 感情形容詞から

恐ろしく、たまらなく、耐え難く、おそるべく

F 真実味 実感性

ほんとに、まことに、実に、全く、心底、無性に、痛切に、身にしみて

G 予想や評判との異同

案外, 意外に, 存外, 思いのほか, 予想外に, さすがに

H その他

返す返すも, それは, どこまでも

工藤 (1983) で挙げられているこれらのものは、必ずしも通時的な変化を念頭においたものではない。現代共時態の中での、程度的意味を表し得るものという枠組みのものではある。しかし、程度的意味というものがどのような意味から発生するのか、またどのような過程を経て程度的な意味が生まれるのか、程度的意味発生にはどのような類型があるのかということを考える上で重要な指摘と思われるので、これをもとに検討を進めることにする。なお、まさに転成の過渡的状态にあるものだけでなく、「ほぼ程度副詞に移行しおえたと思われるもの」であるものについてもこの枠組みに関わるものは言及する。

まず以下で、工藤 (1983) のこの枠組みについて、各項目の内容や項目間の類似点などを指摘し、拙稿で扱った事例を中心に、その他の語例も挙げながら、工藤が挙げるもののほかにどのような語例がそれぞれの項目に含まれるか、といった点を検討する。

Aの「程度量の形容詞から」というものは、程度量の大きさを含意する形容詞・形容動詞が連用形で用いられるときに程度副詞的になるものである。ただしここで挙がっているのは、いずれも程度としては極度・高度を表したものであり、他の程度的意味とは異質と考えられる。このほかには、例えば、「大きく」「たくさん」などが挙げられよう。拙稿で扱ったものの中で「相当」「随分」は、具体的な分量の大きさにおいて程度量的意味と結びついたものと考えられるので、意味的にはこの分類に当てはまると思われる。

Bの「目立ち性」として挙げられているものは、「主として形容詞から」とあるものの、その多くは他と際だって目立つことを表す動詞的表現をもとにしたものである。確かに程度の高さを表していると考えられるが、これも意味的には結果として極度・高度に近いものといえる。形容詞連用形の例としては、「すばらしく」などがここに含まれよう。

Cの「とりたて性 比較性のもの」として挙げられているものは、B「目立ち性」と似ているが、あるものの特質を他との比較によって表そうとするものである。これらも意味的には極度・高度に近いものが多いが、確かにこれらは「とりたて」という性質を持つものとしてまとめられるものではある。拙稿 (2008) で扱った「むげ」も、「無下」という漢字表記と結びつくことで、〈それより下が無い〉という意味を獲得したと考えられるので、それは「比較性」の性質を持つともいえる。ここで挙がっているほかには、「極めて」「至って」や「いつになく」「いつにもまして」などが挙げられよう。

Dの「異常さ 評価的」とされるものは、あるものの性質が他と比べて異常なものであるということを、その異常さに対する評価性を場合によっては伴いながら表すものである。形容詞的意味を持つものという点で、次のEのものと同接すると思われる。しかし、意味的には極度・高度に偏る傾向はある。また、「不自然に」「世にも」などは、程度副詞としての成熟度は低いと

思われる。ただし、拙稿（2012a）で扱った「随分」は、「評価的」な意味を獲得するので、程度的な意味との意味的な近接性という点では「随分」の例がここに当てはまると考えられる。また、その他には、「非常に」「大変に」などもここに含まれよう。

Eの「感情形容詞から」とされるものは、感情形容詞の連用形が、程度副詞的に用いられるものである。一語の副詞としての成熟度という点では問題が残るが、形容詞の連用形が程度的意味を獲得するという点で重要なものと思われる。感情形容詞に限らず形容詞の連用形が程度的含意を持つことが考えられ、拙稿（2008）で扱った「むげ」も、程度的意味の発生においては、こうした形容語の持つ程度性と関連がある可能性がある。他には「すさまじく」「いたく」などが挙げられよう。

Fの「真実味 実感性」は、真実であるということ、またそのことを実感していることを表すものである。他には、「真実」「確かに」などが含まれよう。「真実」については後述する。

Gの「予想や評判との異同」というものは、主に予想・想定に反していることを表すものである。他には「思ったより」「噂にたがわず」などが句的なものとして含まれよう。

以上のように程度性の獲得に類型があるとすれば、それらの類型について、どのような過程によって程度的意味を獲得していくのかということを見ておく必要があるであろう。前述した通り、転成のしかたと程度的意味発生の過程には関連性があると考えられ、また、同一の類型に含まれるものは、程度的意味の発生について類似した過程を持つと考えられるからである。

さて、このような八類別を示す一方で、工藤（1983）は、程度副詞とその周辺のなものには「すこし・うんと」のような（数）量性の濃いものから、「ひどく・おそろしく」「けっこう・意外に」のような評価性の濃いものまでであるとし、「コトに対する評価副詞と、サマについての程度副詞」は、「“サマに対する評価”を媒介として交差し隣接する関係にある」とする。つまり、具体的な数量的意味を一方の極とすれば、もう一方には、事態に対する評価の意味があり、程度的意味の周辺のなものには、数量的意味と評価の意味とを両極とした意味的なつながりがあるという指摘である。

工藤の八類別でいえば、A「程度量性の形容詞から」というのは、具体的な数量的意味をもとにした転成の過程を示すものといえる。そして、それ以外のものについては、「評価」という言葉を使っているのはD「異常さ 評価的」のみであるが、いずれも何らかの意味で評価の意味と関連があると考えられる。例えば、B「目立ち性」は、他と際だって目立つことを動詞や形容詞によって表したものであり、「ずば抜け」たり「群を抜い」ていることをそのようなものとして評価するものといえる。C「とりたて性 比較性のもの」も同様に、「特別」「殊のほか」であることをそのように評価するものである。D「異常さ 評価的」は、あるものが異常な性質を持っていることをそのように評価するものである。E「感情形容詞から」も、物事の性質・程度を、「恐ろしい」「すさまじい」と評価することと関係があるであろう。F「真実味 実感性」も、「ほんと」であること、「まこと」であることを実感を伴ってそのように評価するものである。G「予想や評判との異同」も、予想に反した物事に対して「意外」「予想外」とであると評価するものである。

このように見てくると、程度的意味とその周辺のなものとの関わりを考えた場合、具体的な量的意味を一方の極として、濃淡の違いこそあれ様々な評価の意味が、程度的意味と大きく関連しているようである。このことから、副詞における程度的意味の発生ということを検討していくにあたっては、程度的意味の周辺の意味として、量的意味・評価の意味との通時的な関わりをまず明らかにすることが必要であるといえる。その上で、評価に関わる様々な広義程度的意味について、個別に検討していくことによって、類型のあり方がより詳しく明らかになるものと考えられる。

そこで以下では、具体的に拙稿で扱ったものをもとにして、その周辺の意味としての量的意味・評価の意味との関わりから、程度的意味の発生のプロセスの詳細を検討していく。そのことで、通時的な意味変化としての程度的意味発生にはどのような過程があり、それらはどのような類型としてまとめられるかということ、明らかにすることができるであろう。その際、まず量的意味をもとに程度的意味が発生するものを取り上げる。次に、程度的意味と評価の意味とが関わるものを取り上げる。それには、評価の意味から程度的意味が発生する場合と、程度的意味が評価性を帯びる場合とが考えられる。評価の意味をもとに程度的意味が発生するものとして、より具体的には工藤の示す「真実性」と「比較性」に関わるものを取り上げる。

4. 量的意味と程度的意味

以上のような視点を踏まえて、以下では、副詞が程度的意味を獲得する事例をもとに、程度副詞化の際にどのような過程を経て程度的意味が発生しているのかということを検討していく。

まず挙げるべきものは、量的意味と程度的意味が関わりを持つ場合であり、「量的意味から程度的意味へ」というべきものであろう。これは、副詞用法が、具体的・物理的な量的意味と結びついたところから、抽象的な程度の高さを表すようになるものである。工藤(1983)は「無限に」「限りなく」などを程度量性の形容詞からの転成として括るが、おそらく、このパターンは形容詞からの転成には限らないであろう。ここでは、例としてまず、「相当」の場合を見てみる（「相当」については拙稿 2009 で扱った）。

この「相当」の場合は、中国文献の「相当」を平安時代初期に日本に受容したのであるが、当初は原義を大きく離れず、動詞として〈当たる、相当する、対応する〉という意味で使用していた。それが中世末期から「相当の」という連体修飾用法や「相当に」という連用修飾用法でも使用されるようになった。それとともに、「相当」に、〈そのもの持つ程度の高さ・量の大きさにおいて当たる、対応する、ふさわしい〉という含意が生じた。つまり、「相当」が意味変化して程度・量性のあるものとの結びつきができたといえる。

ただしこの段階の「相当」は、抽象的な程度ではなく専ら具体的な量の大きさを表していた。また、何に相当するのかが容易に推測できるものであった。(1) のような例である。

- (1) ハテ、俺が内に居れば、家賃から米代木代、相當に錢をやらにゃ掛ける者が無い。そこであいらを倒して道具諸色は賣てしまい、金にして内を出て来たは、コリヤ是前先といふ物

じゃ。(歌舞伎・韓人漢文手管始)

家賃米代木代に釣り合うように銭をやるということであるから、具体的な相当する分量が比較的明確である。つまり、「相当」の場合は、漢語の原義としては動詞であったのが、〈相応する、対応する〉という意味から、〈分量の大きさにおいて釣り合う〉という意味が発生したことが、後に程度的意味と結びつく第一段階といえる。

そしてこのように分量の大きさと結びついて、量・程度性を帯びた連用修飾用法として使用されることによって、抽象的な程度の高さをも表す程度副詞として発展していったと考えられる。近代の例では、「相当に」とともに「相当 ϕ 」の形の連用修飾用法も使用例を多くしていき、それとともに、量的な大きさだけでなく、抽象的な程度の高さを表し得るようになる。つぎのような例である。

- (2) 君の兎角多面多藝多能なる一事は、世間多く其類を見ない、…中略…あらゆる事物に向て夫々の趣味もあり、又多少の研究も重ねて居る、俗に所謂間口百聞なる語は、君を評するに尤も適切な諺で、其癖奥行も皆相當に深い、自然ドンナことにでも大抵の話が出来るので、種々雑多な方面に其友人知己を有して居る、又和漢學には餘程造詣する所深いが、洋學に對しても相當調査研究を重ねて居る、何は兎も角、一言にして云へば君の人物は『天品』の二字を以て尤も當れりと云ふべきであらう。

(太陽、1909年11号、川尻琴湖「個人としての犬養木堂君」)

(2) の例は、「相当に」の形と「相当 ϕ 」の形の両方が表れているが、いずれも具体的な分量の意味から離れ、抽象的な程度を表したものである。さらに、何に「相当」するのか明示されず、「相当」する対象が特に無い場合でも、「相当」という語だけで程度の高さ・量の大きさを表すようになっていった。つまり、分量の大きさと結びつき、抽象的な程度の高さへと変化・拡大していったことによって、何かに「相当」という漢語の原義から離れて、程度副詞としてより純粹なものへと進行していった、ということができる。

- (3) 租界の外に出ると大ていは支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。唯商業の取引の盛な部分は、相當に活気を帯びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

(国定読本、3期6-1)

(3) の場合も、何に相当するかという基準という点では若干原義を残すものの、活気を帯びているさまという抽象的な程度の高さを表している。

また、「相当」と同じように、純粹程度的意味を獲得する過程で量的意味と結びつく例としては、「随分」を挙げることができる(「随分」については拙稿2012aで扱った)。

漢語「随分」の原義は、〈分に随う、分相応〉という意味であった。次の例のようなものである。

- (4) 毎度無失藉、随分知因果之理。(治安四年、九条家本延喜式卷十二裏文書(「平安遺文」))
 (5) 是以大小諸寺。每有擅越。田畝資財。隨分施捨。累世相承。(日本後紀、大同元年八月)

(4) は、分に応じて因果の理法を知ることを表したものである。それに対して、(5) は、施主が田畝や資材を応分の量だけ喜捨することで、恵みが得られるということを表している。ここでは、財産を喜捨するという作用の様態を修飾すると同時に、喜捨する財産の分量をも含意するものとなっている。つまり、自分のできる範囲内での、天分に応じた最大量という量的含意を持つといえる。

(6) 「大悲者には、異事申さじ。あが姫ぎみを、大貳の北の方ならずば、當國の受領の北の方になしたてまつり給へ。三條らも、ずるぶむに榮えて、かへり申しつかうまつらむ」と、ひたひに手をあて、念じ入りてをり。(源氏物語、玉鬘)

(6) は、三條らが出世・繁榮するさまを表している。量的含意を持ち、変化動詞に係っている点で、現代語の量副詞に通じる用法といえる。それが、次のように、形容詞に係って抽象的な程度の高さを表す程度副詞用法として使用されるようになる。

(7) 伊藤六はや射おとされ候ぬ。奴にも随分さねよき鎧をきせて候つるものを。(保元物語、中)

(7) は鎧の材料となるさねが良質ということであり、形容詞の程度性を修飾するものとなっている。

このように、「相当」「随分」の場合、具体的・物理的な量的意味と結びついたことが、程度的意味発生の端緒といえよう。このように、抽象的な程度の高さへ移行しやすい意味として、量的意味と結びつくことからというものを、一つの類型とすることができよう。

この他に、「相当」「随分」と同じように、量的意味から程度的意味を獲得したと考えられるものには、例えば、「大分」「十分」などが挙げられる。

市村太郎 (2011) によると、「だいぶ」は、近世上方資料において、「金銭等の量や規模が大きなさま」を表すものが多いという。「大分」が量を表す例として、次の (8) のような例を挙げる。

(8) 與次兵衛殿に難儀を見せ金銀大分取ったな (山崎與次兵衛壽の門松)

同時に次の (9) のように程度の高さを表すものもあるとする。

(9) 今夜はでへぶはださむいばんだ (傾城買四十八手)

このように、近世において量的意味との結びつきが強かったという「大分」であるが、近代に入って次の (10) のような例になると、気の荒さという、抽象的な程度の高さを表すものといえるものになっている。

(10) もとは極々内気の優しいかたが、この頃ではだいぶ気が荒くなって、何だか心配だと源兵衛が来るたびに申します。(夏目漱石・草枕)

このように近代以降の「大分」は、量的意味だけでなく、程度的意味を表している。「大分」も、量的意味で使用される段階を経て、「気が荒い」ことのような抽象的な程度の高さを表すようになったものと考えられる。

また、「十分」は、かつては動詞を修飾し、必要に応じた分量であることを表すものであった。次のようなものである。

(11) 君も男児なら、更に一步を進めて、妻君に為るやうに十分運動したまへ。

(尾崎紅葉・金色夜叉、前編)

(11) は、妻君にするに足るだけの分量を運動するということを表したものである。それが、次のようなものになると、「面白い」という形容詞を修飾するものとなっている。

(12) 時としては招待切符なんか貰つて行つてそして十分面白い芝居を見せられて満腹して歸ることさへもある。(太陽、1925年13号、生方敏郎「傍観人として」)

(12) は、面白さの程度の高さを修飾するものである。「十分」の場合も、必要に応じた分量であることを表す量的意味から、抽象的な程度の高さを表す用法を発生させていると考えることができる。

以上のように、量的意味から程度的意味が発生したと考えられる一群の副詞がある。ここで挙げた他にも、今後の詳細な検討が必要ではあるが、「涯分」「一杯」なども同様の過程を経ている可能性のあるものとして挙げることができよう。このように、程度的意味を発生させやすい意味として、量的意味というものを挙げることができる。そして「分量の大きさと結びつくことが、抽象的な程度の高さを表すようになる契機となる」という過程を、程度的意味発生の一つの類型とすることができよう。

5. 真実性と程度的意味

次に本節以下で挙げるのは、程度的意味と評価の意味との関わりである。程度副詞が評価の意味と相関することを見ていく。これは、程度性には評価性が隣接するということでもあるから、先の程度性獲得のパターンからすれば、D「異常さ 評価的」と無関係ではないと考えられる。

その中でも、まず本節・次節で挙げるのは、評価の意味をもとにして程度的意味が発生したものである。つまり、評価の意味の中で、特に程度的意味を発生させやすい類型としてまとめられると考えられるものが、いくつかあるのである。本節では、その一つとして、「真実性」という意味を取り上げる。

「真実性」の意味を持つものは、事態の様態を真実性という点で示すということから、眼前の事態をそのようなものとして主観的に確信を持って評価・断定する用法を獲得する。それによって、〈ほんとうにそうである〉といった主観的な確信という主観的評価に伴う強調の含意を契機として、事態がそのようなものとして存在していることの度合いを強調するものとなる。これは、「評価の意味が度合い強調を介して程度性を帯びる」とでもいえるものである。ここでは、例として、「真実」を挙げる（「真実」とその類義語については拙稿 2013 で扱った）。

「真実」は本来仏教語であり、仏典において多数の用例が見られるものであった。仏教的な究極の真理としての意味で〈嘘いつわりのない、ありのまま〉を表すものであった。それを、平安

時代には、仏教的な意味合いを離れ、単に〈偽りない〉といった意味で受容し、「真実に」という連用修飾用法で〈偽りなく〉という意味で使用されるようになった。次の例のようなものである。

- (13) 親あはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶えいりにければ、まどひて願たてけり。(伊勢物語、四十)

(13)は、こうして全く息が絶えてしまうことはあるまいと思っていたが、本当に息が絶えてしまったので、うろたえて、神仏に願を立てたということである。この段階では、後代に見られるような広義程度的意味を表したのではなく、「真実」の原義・実質の意味を生かした様態修飾用法といえるものである。

そして、嘘いつわりがないさまを表すことから、眼前の事態をそのようなものとして主観的に確信を持って評価・断定する用法が発生した。それは、様態修飾ではなく、主観性の強い評価の意味を伴った連用修飾用法であるといえる。次のようなものである。

- (14) 兵衛佐の返事には、「今こそさまにはの給へども、慥に頼朝討べきよし、謀反のくはたてありと申者あり。それにはよるべからず」とて、土肥・梶原をさきとして、既に討手をさしむけらるゝ由聞えしかば、木曾真実意趣なきよしをあらはさんがために、嫡子清水の冠者義重とて、(平家物語、巻第七)

- (15) 我等がつみ科を真実にこうくはひして今より後科をおかすまじきと(ぼうちずもの授けやう)

(14)・(15)は、本当に、真実心から、恨み心を持っていないことを表そうとするということである。これらは、〈偽りない心で、天地神明に誓って〉といった意味で用いられている。

ここで挙げたような「真実」の連用修飾用法は、前代までの単に〈偽りない〉ということではなく、〈偽りない心である〉というように、主観的な感情・実感を表すように意味が変化している。それに伴って、連用修飾の機能としては、被修飾語の表す事態に対する評価を表すものになっている。「真実」の他、「実は」「本当は」などの副詞をもとに「真の情報を導く副詞」という枠組みを提唱する藤原浩史(2011)では、「ほんと」が助詞「に」を伴わずに副詞的に使用される場合を例に、「感覚的・感情的な実感であり、話者にとって疑いようのないこと」を表すと説明している。藤原(2011)は現代語を対象としたものであるが、ここでの「真実」の場合も、話者の心の中での実感に基づく確実性を表すものである点で共通する。

さらに、そうした主観的评价に伴う強調の含意を契機として、事態がそのようなものとして存在していることの度合いを強調するようになった。次のようなものである。

- (16) 思ふに彼等の中には真実、之を以て永く彼我両立の基礎と為すを得べしと信ずるものあらんも、眼光深く形勢の前途を射り、且少しく露国宿世の対東亞策を解するものは、直ちに之を以て我国の独立、平安、利益に対する一大危険と為さざるを得じ。

(太陽、1901年2号、「輿論一斑」)

- (16) のようなものは、例えば形容詞のような程度性を持つことが明確なものを直接修飾するも

のではなく、「基礎と為すを得べし」であることに対して、主観的に確信を持って断定するような用法であるといえる。特定の語でなく、文全体に係っているものが多い点からも、程度副詞というより、文副詞・評価副詞的性質の強いものであることがわかる。これらは、事態全体をそのようなものとして主観的に評価・断定する用法である。そしてそれと同時に、〈ほんとうにそうである〉といったような主観的な確信に伴う度合い強調の含意があるという側面も備えるものであって、このような用法は、広義程度副詞の意味を持つといえる。こうして「真実」は、事態に対する主観的評価に伴う強調の含意を契機として、事態がそのようなものとして存在していることの度合いを強調するものとなることで、広義程度副詞の意味を持つようになったのである。

このように、漢語「真実」における程度的意味の発生は、評価性の獲得と、それによる度合い強調の含意の発生を経て生ずる過程を持つと考えることができる。

「真実」と同じように、事態がそのようなものとして存在していることの度合いを強調するようになったものには、「真実」の類義語である、「まこと(に)」「本当(に)」「事実」「実際」が挙げられ、これらも同様の過程を経ている可能性のあるものとして指摘することができよう。なお、前述の通り、藤原(2011)も、「真実」の他、「本当」「事実」「実際」などの語を、「真の情報を導く副詞」としてまとめている。程度的意味との関わりを述べたものではないが、共通する意味を持つこれらの語群が、相互に関連を持ち、同様の方向へ意味変化を起こす可能性について示唆するものといえよう。このように、評価的意味を獲得することによって、程度(度合い強調)性を帯びようになりやすい意味として、評価的意味の一つである「真実性」というものが挙げられる。そして、「真実性をもとにして主観的評価性を獲得し、それによる度合い強調の発生を経て程度的意味が発生する」という過程を、程度的意味発生の一つの類型とすることができよう。

6. 比較性と程度的意味

次に比較性から程度的意味が発生するパターンについて考える。これも、評価的意味をもとにして程度的意味が発生したものであり、評価的意味の中で、特に程度的意味を発生させやすい類型としてまとめられると考えられるものの一つである。このパターンについては「むげ」を例として考えたい(「むげ」については、拙稿 2008 で扱った)。

「むげ」は、文脈的意味を「むげ」自体の中に取り込んで「無下」という漢字表記と結びつき、それによって程度副詞的用法を発生させたといえる。これは、漢字表記と結びつくことで程度的意味を獲得するという過程を介してはいるが、比較性という評価的意味から程度的意味を発生させたものといってよい。漢字表記「無下」の文字通りの意味は〈それより下が無い〉という意味である。これは先の工藤(1983)の分類でいえば、C「とりたて性 比較性のもの」に当てはまると考えられる。そこで、比較性から程度的意味が発生するパターンについてそのプロセスの詳細を見ることにする。中世には「無下」は以下のように使用される。

(17) 政孝申云々、無下に不知子細之申状也、

(出雲千家家文書、嘉禄元(1225)年7月19日(「鎌倉遺文」))

- (18) 「さこそ世をわづらうといひながら、無下になさけなかりける物かな」とぞみな人慙愧しける。(平家物語、卷第十一)

中古には、和文資料以外に、「無下」は見られなかったが、(17)のように、「無下」という漢字表記と結びつくことで、中古の「むげ」を、「無下」と漢字表記する語として継承し、古記録・古文書などの漢字文献でも使用されるようになっていく。(17)の例は意味的には〈全く、すっかり〉というもので、中古和文資料に見られたものと同じなのであるが、「無下」という漢字表記によって「むげ」は、〈それより下が無い(ほど悪い)〉という意味を獲得した。それを契機として、(18)の例が生まれるのである。ここでは、形容詞「なさけなし」を修飾して、その程度の高さを表したものである。

前述したように、「無下」の文字通りの意味は〈それより下が無い〉という意味である。これは先の工藤(1983)の分類でいえば、C「とりたて性 比較性のもの」に当てはまると考えられる。そこでも挙げられている「この上なく」と近い意味を表すと思われる。それを超えるものが無いということから、それ以外のものと比較して程度が高いことを表すようになっていくと考えられる。〈それより下が無い〉ということは、他と比較してそれが最も度合いが大きい・極端な特徴を持っているということである。また、そうであれば、他のものの中でそれが特に目立った様子であるということにもなる。そこから、そのように他との比較の中で特に際立った特徴・様子を持つものとしてとりたて・評価をすることになる。それによって、例えば形容詞を修飾する場合には、その形容詞の表す性質を、特に他と際だったものとして評価することになり、それは結果として、その形容詞の表す性質の持つ程度の高さを修飾することになり得る。このようにして、「比較性」の意味は、他と比較するという評価の意味をもとに、程度的意味を発生させることになるといえる。

- (19) 没ノ鐘ヲマガフ事ハニタレドモ、食ニマガヘルハ、上人ノ物語ニワスレタルヨリモ、無下ニマサナクコソ覚ユレ。(沙石集、卷第三)
- (20) 信連申けるは、「只今御所へ官人共が御むかへにまいり候なるに、御前に人一人も候はざらんが、無下にうたてしう覚候。(平家物語、卷第四)

(19)の例は、「食ニマガヘル」ことが、「上人ノ物語ニワスレタ」ことに比べて、特に目立った、度合いの大きいものであるというように評価するものである。それはこの場合直接的には形容詞「マサナシ」の性質を評価することにつながる。それによって、結果的に、形容詞「マサナシ」の程度の高さを表すことになるのである。(20)の場合も同様に、「御前に人一人も候は」ないことを、極端な特徴を持ったものとして評価することから、結果的に形容詞「うたてし」の程度が極度に高いことを表す意味が生じているといえる。ただし「無下」の場合、「上」ではなく「下」が無いということから、前述の通り良い意味では用いられないという特徴は認められる。

なお、工藤が「とりたて性 比較性のもの」として挙げるものには、「かつてなく」「この上なく」など、「～なし」の形の形容詞連用形の例がいくつかある。このことに関連して、形容詞が

程度性を持つ場合があることについて、井上博嗣（1994）に言及がある。井上は「一応形容詞と言いうる諸語にあって、その形容詞としての様相を示す意味であることに於いて、結果として修飾する語句の状態の程度を極度・高度と量っている」ものがあるとする。そして、それらの形容詞の多くが、「たぐひなし」「かぎりなし」「いはむ方なし」などのように、「～なし（がたし）」という語構成のものであり、「～が（と、に）ない（がたい）」とする意味が、そもそも極度・高度の程度をもつ一つのありようを示すことから、それが状態を示す語句を修飾する時、そのありようであることに於いて、その状態の程度を極度・高度と量り示していることになる」と言う。工藤が、D「異常さ 評価的」、E「感情形容詞から」とするものの中にも、「途方もなく」「とてつもなく」、「たまらなく」「耐え難く」といったように、「～なし・がたし」の形の形容詞連用形が含まれている。そしてこのことは、「無下」の場合にも「無（なし）」という要素に認められることである。このように考えてくると、「～なし（・がたし）」の形を持つ形容詞連用形は、とりたて性・比較性と意味的に結びつきが強いという可能性を指摘できる。

またそもそも、形容詞連用形が程度性を持つことについては、小野正弘（1997）にも言及がある。ここでは、現代語の「いたくがっかりした」「おそろしくうまい蕎麦屋」などの表現を例に、形容詞が連用形になると、意味がプラスでもマイナスでもなくなる「意味的中立化」が起り、程度副詞的な意味になると述べられる。工藤の分類でも、E「感情形容詞から」として「恐ろしく」「たまらなく」などを挙げているが、これも、形容詞の連用形が程度的意味を持つことの指摘と考えられる。形容詞の持つ程度的意味が、連用修飾用法によって顕在化する場合があるといえよう。

このように、「むげ」の場合は、「無下」という漢字表記と結びつくことで、その漢字表記から〈それより下が無い（ほど悪い）〉という比較性を帯びた意味を獲得し、他と比較するという評価的意味によって程度的意味を発生させたと考えられる。「無下」という漢字表記と結びつくことで比較と関わる意味を獲得したことが、程度的意味発生の契機となったと考えられる。

「むげ」と同じように、比較性の意味から程度的意味を獲得したと考えられるものには、例えば、「格別」などが挙げられる。「格別」には、次のような用例が見られる。

(21) 弁才妙音二天の名は各別なりといへ共、本地一躰にして衆生を濟度し給ふ。

（平家物語、巻第七）

(22) それはかくべつちがふたが、何と申事じやぞ（虎明本狂言・仏師）

(21) は、弁才妙音の二天は、種類が別であるということである。このように「格別」は〈種類や性質が（他のものと）別である〉ことを表していたものである。それが、(22) のように使用されると、「違う」という語を修飾し、〈他とは異なるほどの性質を持つ〉という意味を表す連用修飾語となっている。それによって、「違う」程度の高さを表すといえるものである。この場合も、「無下」の場合と同様に、あるものの特質を他との比較によって表すことによって、それ以外のものと比較して程度が高いことを表すようになっていいると考えられる。

このように、「比較性」の意味から程度的意味が発生したと考えられる一群の副詞がある。ここで挙げた他にも、今後の詳細な検討が必要ではあるが、「特別」「格段」なども同様の過程を経

ている可能性のあるものとして挙げることができよう。このように、程度的意味を発生させやすい広義程度的意味として、「比較性」というものがあるということができ、「比較性を帯びた意味を獲得し、他と際だった特徴を持つと評価する意味を介して、程度的意味を発生させるもの」を、一つの類型とすることができよう。

7. 程度的意味から発生した評価性

前節までで、評価の意味をもとにして程度的意味が発生したのを見てきた。評価の意味の中で、特に程度的意味を発生させやすい類型としてまとめられそうなものとして、「真実性」と「比較性」を取り上げた。

次に本節以下で挙げるのは、程度的意味と評価の意味との関わりのうち、程度的意味が評価性を帯びるようになるものである。これは、程度副詞が、単に程度の高さや量の大きさを表すだけでなく、事態に対する評価の意味を含んだ程度副詞として使用されるようになったと考えられるものである。例えば、「随分」がその例である（「随分」については拙稿 2012a で扱った）。

「随分」の場合は、次のように、近世までに、抽象的な程度の高さを表す程度副詞用法を獲得している。

- (23) 其身持それとはかくれなく、随分つらのかわあつうして、人中ををそれず、
(好色一代女、巻五)

この例は、つらのかわがあつうことを修飾する程度副詞用法といえる。それに対して、次のような表現は、単に程度の高さ・量の大きさのみを表すものとはいえない。

- (24) 是等に関する英書は随分蒐めたもので、殆ど十何年間、三十歳を越すまで研究した。
(二葉亭四迷・予が半生の懺悔)
- (25) 寝てゐる所を御覧になつたんですか、先生も随分人が悪いな。(夏目漱石・それから)
- (26) 「随分僕も長いこと田舎で暮しました」(島崎藤村・家)

それぞれ直接的には「随分」で程度の高さ・量の大きさを表しているといえる。しかし実際にはそれだけでなく、そのような様子であるということを発見・認識した話者の心理的な驚き・意外さの程度の高さを表しているといえる。つまり、評価性を伴った程度副詞となっているのである。

程度副詞と評価の意味との関わりについては、前述したように工藤 (1983) も、程度副詞と評価の意味とは親近性があると指摘する。(24) ~ (26) の例でいえば、「集めた分量の大きさ」、「人の悪さ」、「田舎で暮らした長さ」の程度の高さを表すとともに、英書を大量に集めたこと・先生が人が悪いこと・田舎での暮らしが長いこと、に対する評価的含意があるということである。それは、そのような程度性を伴った状態 (サマ) に対する驚き・意外さといった評価的意味を介して「交渉し隣接する関係」ということになる。

また、「随分」自体が評価の意味を持つことによって、次のような形容動詞の用法を発生させていることも付け加えることができる。

- (27) お前にもさういう手紙が来たことがあるだろうって、随分だわねえ、叔父さん。私は投書なんかしませんからねえ。(田山花袋・手紙)

これは、叔父さんの発言を「随分」だと評したものである。このような用法も、話者の心理的な驚き、意外さの程度の高さといった評価的意味を獲得したことで、「随分」自体を形容動詞的に使用する用法が生まれたものと考えられる。このような、評価的意味と形容動詞の用法の関わりについては、小野正弘(1986)にも言及がある。小野は、「しあはせ」「果報」「天気」などの例から、中立的な意味を持つものがプラスまたはマイナスの意味を持つようになる際に、形容動詞的用法が発生することを指摘する。程度性以外の、話者の心理的な驚きといった評価的意味は、小野のプラス・マイナスの意味に通じるものである。また、現代語の例でも、工藤(1983)が評価を表す副詞として挙げるもののうち、「あいにく」「さいわい」「親切にも」などは、いずれも形容動詞的用法を持つものである。「随分」の場合もこの評価的意味を獲得したことで、形容動詞的用法が発生したものであろう。

このように、単純に程度の高さだけでなく、評価的含意を伴って使われるようになることから、評価副詞化という(程度)副詞の意味変化が指摘できる。これは、「程度的意味が評価性を帯びる」ものとしてまとめることができる。

このほかに、程度的意味が評価的意味と関わる例として、「結構」などを挙げるができる。「結構」は、〈十分である、良い〉ことを表していた。

- (28) うん、何時迄もさう云ふ世界に住んでゐられ、ば結構さ(夏目漱石・それから)
 (29) 新型の洋服が何か着こんで銀座のカフエーでも飲みあるいてゐる所を見ると結構い、金をとつてゐるやうに見える連中だつて一皮むいて内幕をお目にかければお話にも何もなつたものぢやない。(太陽、1925年5号、白雨楼「財界抜裏物語(一)」)

(28) は、住んでいられればそれでよいということである。それに対して、(29) は、そうした評価的意味をもとに、「いい(金)」という程度の高さを表すものになっている。現代の「結構」は、評価的意味を含んだ程度副詞となっているといえる。

このように、程度副詞が評価性を帯びることがあるということができ、その場合の、程度的意味と評価的意味との関わり・隣接性については、「程度副詞が、単に程度の高さや量の大きさを表すだけでなく、事態に対する評価的意味を含んだ程度副詞として使用されるようになるもの」として、一つの類型とすることができよう。ここで挙げた他にも、今後の詳細な検討が必要ではあるが、「相当」「大分」「かなり」なども同様に、評価的意味を含んだ程度副詞として使用されるようになっている可能性のあるものとして挙げるができよう。

なお、これらの語に関して、評価的意味と程度的意味との先後関係については今後の詳細な検討が必要であろうが、近代の程度副詞について、評価的意味を帯びる語例の多いことの指摘は、田和真紀子(2012)にもある。評価性の強い程度副詞の成立と展開を論じた田和(2012)では、「評価的な程度副詞」には、漢語や漢語を含む語が多いとし、「単語としては中古・中世前期から

あるものの、評価的な程度副詞用法が確認できるのは中世後期以降である」とする。このことから、評価的意味を含んだ程度副詞は、近代の漢語に特徴的な現象である可能性が指摘できる。

8. 程度的意味発生過程の類型

以上、本稿では、程度的意味がどのようなところから発生するのかということ、程度的意味の周辺的な意味との関係から考察してきた。そして、先行研究をもとに、程度的意味が発生するパターンを提示し、具体例に即して程度的意味発生過程を検討した。類型としては、以下の①～③のものを示した。また、程度的意味とその周辺的な意味である評価的意味の関係については、④のものを示した。

① 量的意味から程度的意味へ

分量の大きさを表す意味と結びつくことが、程度的意味を獲得する契機となったもの。量・程度性を帯びた連用修飾用法として使用されることで、量的な大きさだけでなく、抽象的な程度の高さをも表すようになるもの。

② 「真实性」の意味をもとに、評価的意味が程度（度合強調）性を帯びる

眼前の事態をそのようなものとして主観的に確信を持って評価・断定する用法をもとに、そうした主観的評価に伴う度合い強調の含意を契機として、事態がそのようなものとして存在していることに対する程度的意味が発生するもの。

③ 「比較性」の意味をもとに、評価的意味が程度性を帯びる

あるものの特質を他との比較によって表し、それ以外のものと際だった特徴を持つものとして評価する意味を介して、そのものの持つ性質について程度の高さを表すようになるもの。

④ 程度的意味が評価性を帯びる

程度副詞が、単に程度の高さや量の大きさを表すだけでなく、事態に対する評価的意味を含んだ程度副詞として使用されるようになるもの。

このように、程度的意味発生過程、程度的意味とその周辺的な意味の関係としては、現時点でとりあえず①・②・③・④の四つのものを示すことができる。以上に挙げた他に、ここに属す語例がさらにあると考えられる。また、程度的意味が発生する過程の類型としてさらに残されているものがあると思われる。特に程度的意味の周辺的な意味としての評価的意味については、本稿で扱った「真实性」「比較性」の他にも、その中身をさらに詳細に検討する必要があると考えられる。以下にその見通しを簡単に述べる。

工藤(1983)の示す枠を考えると、まずB「目立ち性」とC「とりたて性 比較性のもの」は、内容的に類似しているといえる。Bに「動詞連用形+て」の形のものが多く、Cに「～なく」の形の形容詞連用形が多いというように、形の上での違いはある。しかし、いずれも、他との比較によって、他のものとは異なる特徴・性質を持っているさまを評価するものであるという点が共通している。また、いずれも、程度の高さとしては高度・極度を表すものが多い点も共通している。このことから、B「目立ち性」に含まれる語も、本稿で述べたC「とりたて性 比較性のもの」

と似た程度的意味発生の過程を持っている可能性があると考えられる。

次に、先にも述べたように、「～なく」の形の形容詞連用形のもので、工藤の分類において多くの項目に含まれている点が指摘できる。その点で、C「とりたて性 比較性のもの」D「異常さ 評価的」E「感情形容詞から」に含まれる「～なく（がたく）」の形のもので、程度的意味の発生について類似した過程を持っている可能性がある。また、「～なく（がたく）」の形以外のものも含めて、CDEはいずれも形容詞・形容動詞を多く含んでいる点が共通している。このことから、形容詞・形容動詞の中でも、程度的意味へと転化しやすい意味として、「とりたて性・比較性」「異常さ」「感情」に関わる意味をまとめて考察する余地がありそうである。

また、Eで挙げられている感情形容詞は、「恐ろしい」「耐え難い」など、極端な感情を表すものである。さらに、G「予想や評判との異同」というのも、「案外」「思いのほか」などのように、予想と異なることを表すものが多い。これらが連用修飾用法で使用される場合の評価的意味というのは、本来そうあるべきである（と予想する）ことに反する事態に対して、それを異例・異常なものとして評価するというものである。そうであるとすれば、D「異常さ 評価的」に含まれる「ばかに」「法外に」「不自然に」などとも意味的に類似する。事態を異常なものとして捉えたり、事態に対して極端な感情を抱くといった点で、D「異常さ 評価的」E「感情形容詞から」G「予想や評判との異同」は、類似した内容を持っており、程度的意味発生についても似た過程を持っている可能性があると考えられる。

このように考えていくと、程度的意味の発生について本稿で示した過程の類型を基本にして、工藤の枠組みで挙げられた、周辺の意味から程度的意味が生まれる過程を、おおよそ考えることができることがわかる。詳細については今後検討の余地があるであろう。しかし、本稿で示した四つの典型的過程は、程度的意味発生について、相当程度の範囲を覆うものであるといえる。

調査資料

用例検索・調査には、下記のデータベース・テキストを使用し、また、その他公刊されている索引も使用している。例文の引用は、同データベース・テキスト及び以下の文献による。なお、表記は私に改めた場合がある。

〈データベース〉

「日本後紀」…「日本古代史料本文データ」

(<http://ifs.nog.cc/kodaishi-db.hp.infoseek.co.jp/>)

「平安遺文」「鎌倉遺文」…東京大学史料編纂所データベース

(<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>)

〈テキスト〉

「韓人漢文手管始」「源氏物語」「保元物語」「山崎與次兵衛壽の門松」「傾城買四十八手」「伊勢物語」「平家物語」「沙石集」「好色一代女」

…『日本古典文学大系』（岩波書店、なお、国文学研究資料館の大系本文（日本古典文学・断本）データベース（<http://base3.nijl.ac.jp>）も利用した）

「草枕」「金色夜叉」「予が半生の懺悔」「それから」「家」「手紙」

…『明治文学全集』（筑摩書房）

〈索引類〉

「ばうちずもの授けやう」

…林重雄編『ばうちずもの授けやう おらしよの翻訳 本文及び総索引』（笠間書院、1981）

- 「虎明本狂言」…池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社，1983）
 『太陽』…国立国語研究所編『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』（博文館新社，2005）
 「国定読本」…国立国語研究所『国定読本用語総覧 CD-ROM版』（三省堂，1997）

参考文献

- 藤原浩史（2011）「真の情報を導く副詞の形成」中央大学人文科学研究所（編）『文法記述の諸相』41-64. 東京：中央大学出版部.
 市村太郎（2011）「副詞「だいぶ」について—近世語を中心に—」『早稲田日本語研究』20: 46-57.
 井上博嗣（1994）『古代語における程度副詞』大阪：清文堂.
 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実（編）『副用語の研究』76-98. 東京：明治書院.
 鳴海伸一（2008）「「むげ」の意味変化」『国語学研究』47: 115-102.
 鳴海伸一（2009）「「相当」の意味変化と程度副詞化」『国語学研究』48: 133-120.
 鳴海伸一（2012a）「程度的意味・評価的意味の発生—漢語「随分」の受容と変容を例として—」『日本語の研究』8(1): 60-45.
 鳴海伸一（2012b）「時間的意味発生の過程の類型—副詞を中心に—」『国語学研究』51: 116-102.
 鳴海伸一（2013）「真実性をもとにした程度的意味の発生—漢語「真実」とその類義語を例として—」『訓点語と訓点資料』131: 29-42.
 小野正弘（1986）「中立的意味の変化の一解釈—形容動詞化と「ウナギ文」化—」『国文鶴見』21: 90-98.
 小野正弘（1997）「形容詞連用形における意味的中立化」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法体系と方法』61-77. 東京：ひつじ書房.
 田和真紀子（2012）「評価的な程度副詞の成立と展開」『近代語研究』16: 87-100. 東京：武蔵野書院.

Processes and Patterns of Development of Degree Meaning in Adverbs

NARUMI Shinichi

Kyoto Prefectural University / Project Collaborator, NINJAL [-2013.10]

Abstract

This paper explores the processes and patterns in the development of degree meaning in Sino-Japanese adverbs and demonstrates those process and patterns of semantic change with concrete examples. Particular attention is given to the diachronic relationship of meanings peripheral to degree meaning.

The paper presents three patterns of development for degree meaning (①~③) and one pattern by which evaluative meaning develops from degree meaning (④).

- ① degree meaning develops from evaluative meaning
- ② degree meaning develops from the meaning of credibility
- ③ degree meaning develops from the meaning of comparability
- ④ evaluative meaning develops from degree meaning

Key words: degree adverb, degree meaning, evaluative meaning, credibility, comparability